

# 海外フィールドワーク in Cebu Island

日時 時間各日10:00~16:00  
 1月20日~23日(4泊5日)  
 場所 フィリピン・セブ島  
 参加者 2年生: 藤原祈従、村瀬美乃里  
 1年生: 大島未夢、坪川凜香  
 引率者 井藤 勝夫 教頭  
 渡部 正実 教諭  
 主な研修場所  
 1日目: 移動日(セントレア~成田  
 ~セブ国際空港)  
 2日目: ゴールデンゲートウェイ  
 (流通産業協同組合様  
 技能実習生日本語研修所)  
 貧困地区  
 (Chinese Semetry 内)  
 でのフードドネーション  
 3日目: IDEA ACADEMIA  
 (英語語学研修所)  
 4日目: 移動日(セブ国際空港  
 ~セントレア)

今回の研修旅行では、NPO縁塾理事である株式会社ファミリーカーシヨップ吉田正社長の御尽力で、外国人技能実習生が日本語を研修する語学施設「ゴールデンゲートウェイ」に訪問することができた。夏のオープンエンリッチの計画段階でこの研修所の話を聞き、どうしても可児高生に「必死に学び、必死に家族のために働く彼らの姿勢から何かを学んでほしい」というのがこの研修の原点である。

1月20日(月)・1日目

朝、突然の「中部国際空港→セブ島直行便欠航」の一報が入り、この日の出発が危ぶまれた。研修後の日程や直行便の出発曜日を考慮するところの研修自体が中止になる可能性もあったが、「成田→セブ島直行便に乗れそう」の報告により急遽

出発を繰り上げ学校を後にした。名鉄

ミユースカイ→セントレア出発時間もかなりギリギリの時間であったが、無事セントレアを出発、途中、今回予定で見ることがなかった富士山を見ることができた。雄大な富士山が雲海に浮かぶ姿を見て、富士山に今回の旅の成功を祈りつつ成田到着。ここで国際線手続きを行い無事に一路フィリピン国・セブ島へ向かうことができた。機内は気流の関係で揺れることもあったが概ね快適な空の旅を経験することができた。そして生徒にとっては初めての「機内食」を味わう。Fish or Beef? ”ここで究極の選択に迫られた。味については生徒の感想を楽しみにしていたら、セブ島に到着後、初めての入国審査を経験し、今回の旅

をコーディネートしてくださるTEDさんにお会い。TEDさんの適切なコンダクトイングによりスムーズにホテルチェックイン、到着が日本時間で12時近かったため「早めに就寝」し、次の日に備えることに。ちなみにフィリピンと日本の時差は日本の方が1時間早い。この日の活動限界がそろそろ来ていたのだろう、生徒は早々と就寝した。

1月21日(火)・2日目

7時に朝食会場前で合流。朝食はレストラン。オープンキッチンで各国の料理が所狭しと並び目移りしてしまう。行き届いたサービス・ホスピタリティ、個性たっぷりの料理を経験する。朝食後、一路初めての研修場所である「ゴールデンゲートウェイ」日本語研修所へ。ここは外国人技能実習生を日本に送り出す前に日本語を3ヶ月習い、決められた事業所に配属になる。部屋へと案内された直後「おはようござい

ますっ」の気合の入った挨拶を一齐に受け、圧倒される可児高生。そして先生お二人から「では12時までよろしくお願います」と10時から



2時間、彼らの貴重な時間を頂戴し、「日本・可児市・日本の生活について」メインスピーカーがiPadを片手に話し、他のメンバーは自分のスマホを片手にそれぞれ話をするスタイルでプレゼンテーションをした。必死に生の日本人が話す日本語を理解しようと、真剣な眼差しでメモをしながら話を聞く実習生の態度に応じようと必死に説明をしました。残り40分のところでQ&Aセッションということで実習生の方々からの質問を日本語、英語を織り交ぜながら交流しました。「自分たちが簡単だと思う日本語では、なかなか理解してもらえず外国人にやさしい日本語で話すのは難しいけど、頭を使った」『夏のオープンエンリッチでのやさしい日本語講座』を経験していなかったら乗り切れなかった」という感想が出た。渡部も「日本で働いて成功するには」ということで英語と日本語で元気な挨拶・礼儀正しい事の大切さ、日本語を前向きに学習する事の大切さ、そして分からない時に「分かりませんでした、もう一度お願いします」と確認する事の大切さについて話をさせていただいた。





Cebu Chinese Semetry の文字に、  
「本当に墓場なのだ」と確認してしまう。

「このあと昼食をはさみみ、午後の研修、「フードネーションをスラム街で行う」という事は事前に確認していたがどこのエリアのどうい場所でのような人を対象にボランティア活動をするかは当日まで分からないという事だった。どのような場所なのか、到着してから驚愕する。墓場、なのである。日本で墓場というと、墓石が組み上がっていて、といったものなのだがイメージ的には沖縄の大きな墳墓のようなものをイメージして貰えばいいだろうか。中国人の富豪がそこにそっくりした屋根付きの墳墓を建造しているのだが、そこに人が住んでいるのである。しかも、墓の持ち主である遺族も「埋葬品を荒らされるよりは良い」と、



華僑の建てた墓とその建物で雨水・  
夜露を凌ぐ人々。想像を超える光景。

お互い Win-win-win の関係なのだそう。降車してからすぐに支援をする子ども達に囲まれて可見高生も最初はどうか接すればいいか、距離感に戸惑ったが、人懐っこい子ども達にその緊張も和らいでぐっと距離も近づく。子ども達の手に引かれ、そして2人の母さん、そして NGO 組織の二人のスタッフの案内で墓地を散策し、彼らの生活を垣間見る。NGO の二人から4ローフほどの食パンを手渡され生徒から街を彷徨う子ども達に渡すように告げられる。臆面もなく手を伸ばす子ども、時折大人に戸惑いつつもドネーションをしながら墓地を散策した。墓を利用して生活するすがた、薪や炭で火をおこして炊きをする姿、手洗いで洗濯をする姿、

見るもの全てが衝撃的である。二班に分かれて彼らの自宅にも訪問。彼らの生活について生徒から質問をした。日本人であれば聞きづらい、答えづらい質問にもあつげられんと答えてくれた。電気は電球1個、しかも母屋から線一本を引っ張る。携帯電話は中国製(?)の格安のもの、携帯電話は中国製(?)の格安のものをポロポロになったものを使っていた。回線は超低速回線のデータ通信で格安のものらしい。スラム街で携帯電話を触っている姿は違和感があるがこれも時代なのだろう。墓の上にマットレスを敷いてその上と床で雑魚寝、これが彼らのライフスタイルらしい。一通りお話を聞いて家を後にし、NGO の支援施設に。ここも「元墓」を改造しキリスト教の教会風の支援施設にしているとのこと。ここで子ども達に歌やダンスを通じて Discipline を伝えていよう。時間も押していたのでサンドイッチのドネーションと日本から持ってきたものを寄付をしようとしたが、奪い合いになり収集がつかないためNGO に話し、小分に渡してもらうということになった。



彼らがサンドイッチを頬張る姿を見つ、墓地を後に。NGO のスタッフの方は多治見出身らしく、ドネーションや貧困問題について語ってもらいながらパンを待つ事に。途中、混み合う道を強引に横断するなどひやっとする経験もしてスラム街を後にする。こうして2日目の研修を終え、夜はフィリピン料理レストランで地元の味を体験することに。巨大アサリスープ、鳥肉の葉っぱ包み焼など米に合うフィリピン料理を食した。フィリピンはアジアでも有数の米生産量・消費量を誇る日本と同じ米食の国であるため、料理も米に合うものが多い。ただ、日本で食されるジャポニカ米と違い、長粒種・インディカ米であるため日本米との食味の違いが生徒はどう感じたのだろうか。さて、2日目の旅はこれにて終了である。



2日目、なのであるが一つ一つのアクティビティが新鮮であり、日本とあまりに違う濃密な時間であったため既に3日目なのではないかという感覚であった。この後、ここまでの旅の振り返りを行うため、最上階の夜景を見ながら旅の振り返りや感想をシェアし合った。これまで普通に生きてきたが、それが当たり前でない現実、世界の競争の激しさや貧富の格差を垣間見てこれをどう自分の中で消化し、言葉では伝えられないとは思いますがそれでもできるだけ学校の中で伝えたいよね、という意見で一致した。



1月22日(3日目)

この日は早朝からIDEAACADEMIAという語学学校へ移動。ここでは日本人、韓国や中国の人たちも英語を学びに来る、セブ島でも一番歴史が長い語学学校であるとのこと。講師のほとんどはフィリピン人講師である。



彼ら・彼女達は小学校から最高学歴は大学卒業者もあり、当然英語で専門教育を受けてきた人たちが多いということだ。とはいえ、生徒の感想を聞く「グループレッスンの先生は安定感抜群で、うまく引き出してくれたり、モチベーション上げてくれるけど、個人レッスンの先生は当たり外れが大きい。」との声もあったが、そんなことを言うようなレベルの英語力ではないので「がんばりなさい」とだけ言って引率教員は遠くから見守り生徒は必死に、時には笑顔で英語で活動していた。学んでいる項目やサブジェクトも様々で一日見て回っても全てを把握する事はできないのでどのような学習をしたのかは生徒のレポートを参照していただきたい。ランチはそのままこの語学学校の食堂で、フィリピン名物「シヨリビー」を思い起させるような内容で、「ライス・

ミートスパゲティ・フライドチキン」の洗礼をここで受けた。「これで今回の旅はシヨリビー行く必要はないな」とお互いに話しながら昼食を済ませ休憩。学校内には山側の景色を一望できるリラクシングスペースもありそこで昼寝をする生徒も。いつでもどこでも体力を回復させるために寝るところは大物の片鱗を窺わせる。

午後からもニコマ個人レッスンをこなし、「これで終了」。

「もつとやりたかった」「英語がすらすら出てきた実感がある(※個人の実感に基づいたコメントであり効果を実証・保証するものではありません!)」と充実したレッスンを受けたようだ。



この学校でも当日、韓国からの20名

ほどのグループレッスン受講者がおり韓国から保護者同伴で、または保護者も子供もレッスンを受けているという熱心な人たちも見られた。保護者の1グループと談笑したが「韓国では英語ができない」と一流大学には入れないし、一流大学に入らないと財閥企業には絶対入れないし、そもそも正社員になれないから必死。

お父さんに稼いでもらってそのお金でこうして英語を学ばせないと世界についていけない」と必死な様子であった。このような現実と我々は向き合わずに1億人という内需を支えられた日本社会で今まで通り生きていければこうだった現実と向き合わずとも済むかもしれないが折しも日本人口は減少傾向が顕著でありその中の超高齢社会に生き抜かねばならない宿命を今の10代は背負わされていることを考えると、この事は決して他人事ではない。必ずしもこのような海外の語学学校にいかないと英語を学べないという時代ではない。だからこそ、今あるリソースを十分に活用して世界と戦える英語を身につける必要があると個人的には感じた。

語学学校を後にし、夕食会場のあるマクタン島へ。セブ島の隣にあるこの島はかつてセブ島の王様とは別の王様の統治されていた。その王とはラブラプ王という。

そのラブラプ王がかのマゼランがこの地に上陸した際に戦争をし、その歴史的出来事を記念する公園に立ち寄り、当地の歴史に想いを



馳せながらマングローブ林を遠くに眺めつつ「お土産露店」巡りをした。観光地のやり手おじさん・おばさんの強気な価格設定に土産を買おうか買うまいか迷う一場面もあったがそこは「フィリピン式」の交渉で安値で買う生徒もいたとか居ないとか。

ガイドのTEDさんはこのマクタン島出身であり、おそらく彼の地元を見せたかったのかもしれない。(偶然かもしれないが。)そして夕暮れと共に夕食会場スペイン料理レストランオラエスパニョーラへ。

先程のスペイン海軍マゼランの上陸の歴史的経緯からこの地では観光料理としてスペイン料理が定着したようである。また、このレストランの真向かいが有名ホテルシヤングリラホテルであることもあり観光客に評判のレストランでパエリアを始めスペイン料理を堪能し3日目の日程を終える。



1月23日(4日目)

4日目は帰国の途の日程のためさしてレポートすることもないと思っただが、1日目、夜半に到着した時ある種おどろおどろしく見えた街も、自分たちの目には落ち着いて、冷静に見ることができた事に気づく。乗合バス、バイクタクシー、激混みの道を歩いて行商する路上販売の人たち、露店、土煙川沿いや河口沿いのスラム街しかし、そこには様々なスタイルの生活があり、必死

に生きていく姿があった。確かにこの街は一歩裏道に入れば日本にはない空気感、下からの厳しい目



線、排水の臭い、日本にはない、いやかつて高度成長前やその最中の日本にもこの原風景はきつとあったに違いないが、そういった油断ならない場所も多々ある。そういった地域に住む人々たちを置き去りにしながらも国として拡大し続けるダイナミックな一面も当然垣間見え、発展途上国という側面を忘れさせるような豊かな一面もあり、4日間では正直この国の正体というものは量り知る事はできない。



人がそこに住み、生活し、毎日をサ

バイバルしよう必死に生きていく姿は、この日本にあるような、少し薄れつつあるような、そんな気づきを得ながら一路マクタン空港に。空港到着後チエックインカウンターで「荷物は23kgまで!」という厳しいことを言われ慌てて預け入れ荷物から手荷物の振り分ける渡部を尻目に「私23kg。天才的!」という生徒も居て、教員の面目丸潰れであった。出国の時は26kgでも何も言われなかったのにね。フィリピン航空恐るべし。到着と同時に離陸時間の延期がアナウンスされるものの30分遅れということで無問題。30分なんて遅れに入らない。残った現地通貨ペソを空港内で使う時間が出てきたと、これ幸に買い物に出かける生徒たち。そのようなわけで12時15分機内搭乗し、一路日本へ帰国する事に。普段、英語の教材で貧困問題を取り扱うことは多い。しかし、「どう解決するか?」日本に住む我々にとって答えが出せない問題である。しかし、「何もしない訳にはいかない」とフードドネーションのような活動をしている大人(しかも岐阜県出身者!)の姿を目の前で見ると、



セブ島の有名モールの一つ SM (Save More) Mall にて。

「自分たちには何ができるのか?」と考へ始めるであろう。この後のエンリッチ活動にも示唆を与える旅であった。書面ではなかなか全てを語り尽くせない。今回、このような活動を認めていただいた岐阜県教育委員会・学校支援課および予算を計上していただいた岐阜県・岐阜県議会には感謝を言い尽くせない。生徒も非常に感謝をしている。また、時間割を変更していただき、生徒・引率教員不在をバックアップしてくださった先生方、この活動に送り出していただいた保護者各位、様々な人の協力で、今回このような研修旅行が実現していることに感謝を申し上げ、このレポートを終えたい。今後、エンリッチコアメンバーの活動でも何らかの報告をさせて戴き、みなさまへの還元とさせていただきますたいと考えている。今後とも可児高校・エンリッチコアメンバーへのご理解・ご支援をお願いしたい。(FRH担当教諭 渡部正実)